なぜ、社会的孤立が問題なのか？

社会学系コンソーシアム2023

早稲田大学　石田光規

孤立に注目が集まる背景のまとめ

1. わざわざ「場」に出向かなくてもよくなった
2. そもそも人と結びつかなくてもよい社会になった
3. 誰かと会うためには理由付けが必要になった
4. つながりがより選別的になった

- 特定の人とつき合わなくてよい社会
- つながる相手を選べる社会
- 孤立が生まれやすい社会

- 孤立への対応が求められる社会
- 居場所や地域への注目

ありがちな議論

- 社会的孤立を問題視する視座とそこへの反論

「問題」として取り上げられる孤独・孤立

- 2007：孤立死防止推進事業
- 2012：厚労省通知（孤立死と個人情報）
- 2021：孤独・孤立対策担当室設置
- 2023：孤独・孤立対策推進法

ありがちな批判

人間関係に行政が介入するのか

ひとりでいることの何が悪いのか

新しいレッテル貼りではないのか

「問題」としての根拠

- 深刻な心身への影響
  1. 社会疫学的に証明される孤立のマイナス
  2. 運動不足、アルコール依存に匹敵する有害さ、たばこ1日15本分
  3. うつ、自殺の背景として

- 排除として立ち現れる孤立
  1. いわゆる「恵まれない」層の孤立：経済状況、婚姻、学歴、雇用
  2. 固有の層に見られがちな孤立：男性
  3. 近年に見られがちな傾向：若年層の孤独・孤立

表１　相談相手の有無（JGSS2003、人々のつながりに関する基礎調査）

	R3	R4	JGSS2003
16～19歳	7.0%	7.7%	
20～29歳	8.5%	11.4%	2.60%
30～39歳	11.5%	12.3%	2.80%
40～49歳	10.1%	12.4%	8.10%
50～59歳	10.0%	13.0%	7.10%
60～69歳	7.8%	9.8%	11.80%
70～79歳	6.0%	7.6%	18.60%
80歳以上	5.0%	7.1%	19.70%

データで見る気になる傾向

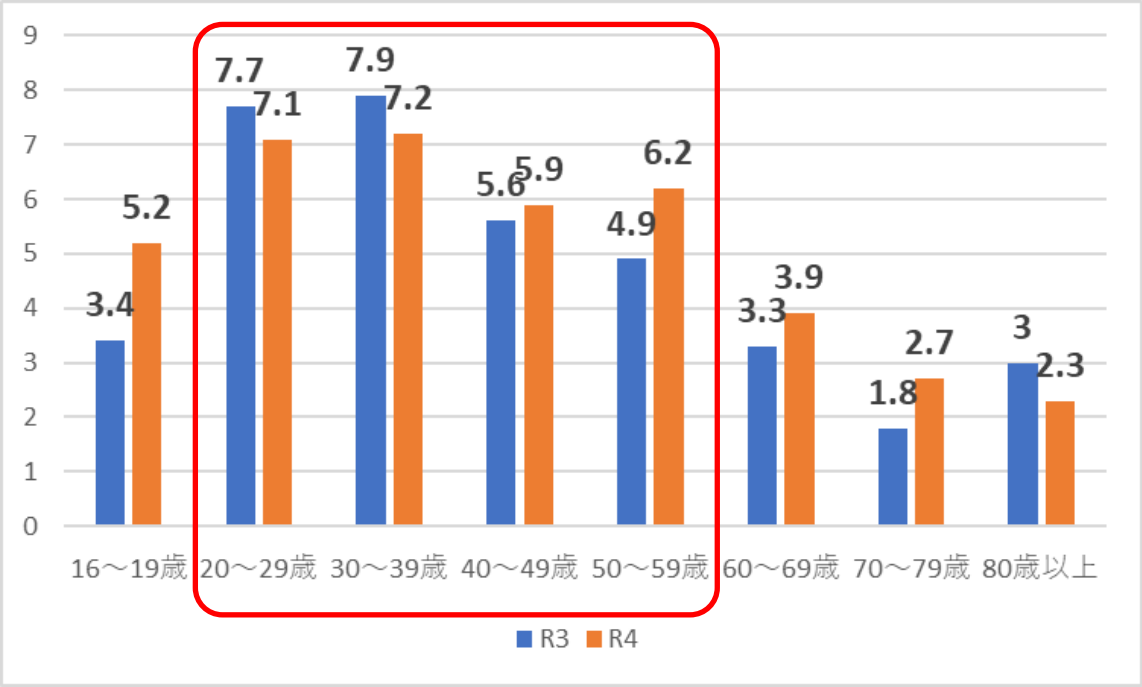
『人々のつながりに関する基礎調査』（内

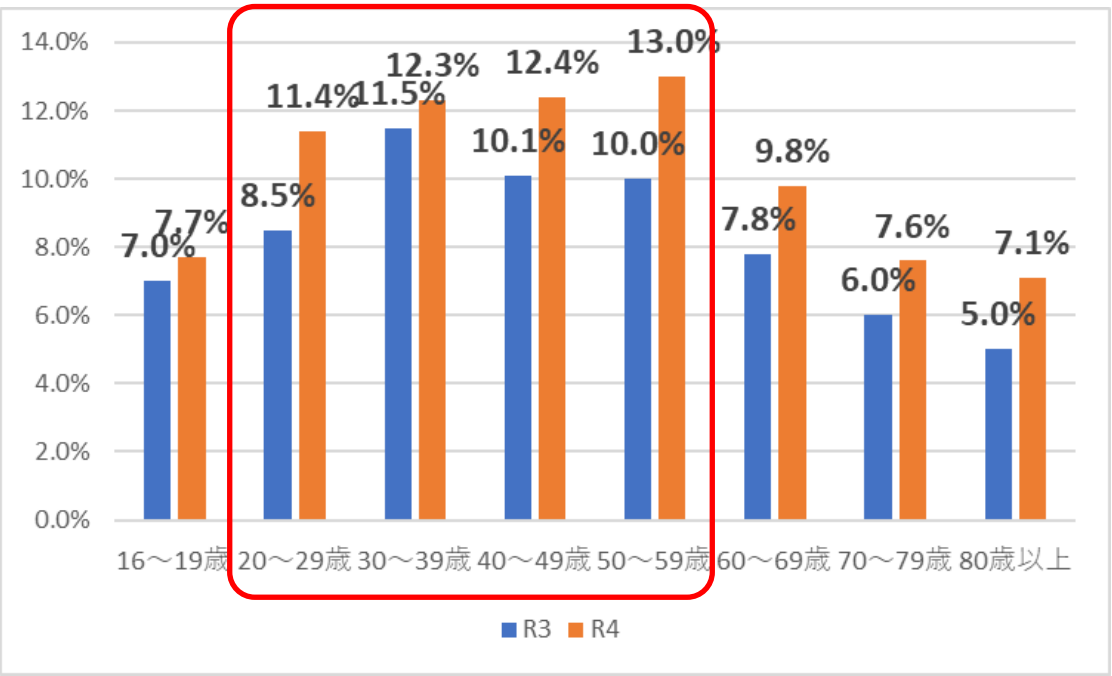
若者の孤独・孤立傾向の確認

1. 孤独感が「しばしばある・常にある」人
   - 20代から50代までが高い
2. 相談相手のいない人（孤立）
   - 20代から50代が高い

今後の心配

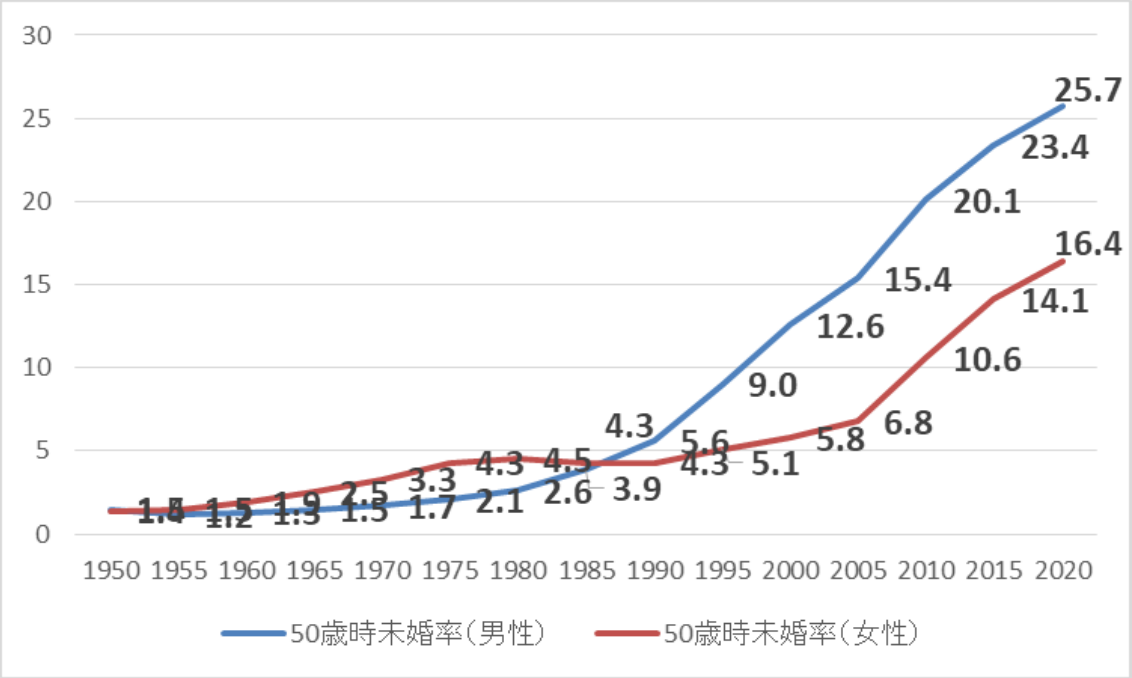
1. 「かつて」と違う若者への心配
2. のしかかる未婚社会の影響



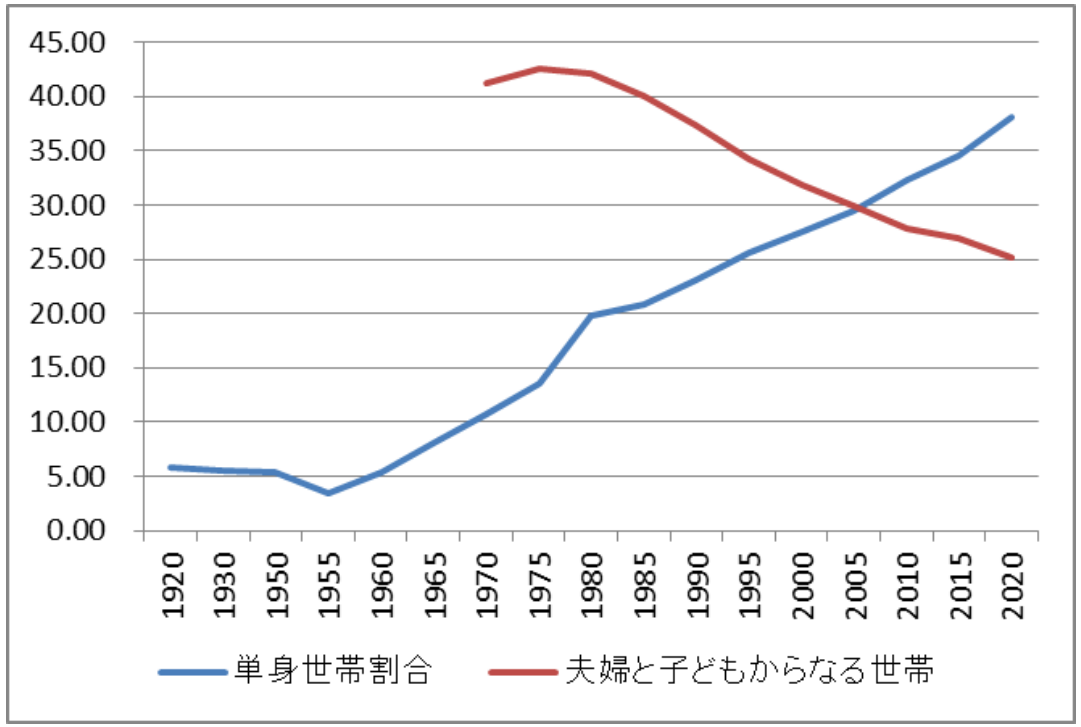


今後の重要な問題として

- 高まる「一人」の指標



- 1990年代から2000年代にかけて失われた「皆婚社会」
- 結婚がひとつの「身分差」として登場する可能性
- 激増が確実視される中年一人暮らし



◆ 「ひとり」がベースとなる社会の到来

◆ 孤立死の社会的対処の必要性

裏腹な対応の難しさ１

対象の扱いがたさ

孤立

「問題」につながるケース

精神疾患　虐待

自殺

介入の対象となる孤立

「問題」につながらないケース

ライフスタイルとしての孤立

個人の権利としての孤立

「問題」化することで初めて介入対象となる！

＝

「問題」にならなければ介入しづらい（＝予防的対応が困難）

対象は膨大

虐待疑いのケースでも介入は容易ではない

- 介入するならば相当の人員と労力を要す

裏腹な対応の難しさ２

つながりづくりの難しさ

1. 「孤立」の根本的問題：援助拒否者をどうするか

➢現状、支援を拒否する人への強制介入は難しい
　＝孤立もひとつの権利という意識

➢ある人は「介入すべき孤立」ある人は「問題のない孤立」という判定の難しさ
　＝それだけで人権侵害とみなされる可能性

2. 「寂しい」人への対処は誰の仕事なのか

➢「つながりのデザイン」というコミュニティ問題の根本にかかわる

3. 「つながり」は自由の範疇にとどめるべきか

なかなか支援につながらない人たち

- 3つの「ない」
  - ➢認識：支援の対象だとは思わ「ない」
  - ➢手間：支援の先を調べるゆとり・時間が「ない」
  - ➢情報：支援の受け方がわから「ない」
- 内閣官房の調査から：孤独感別の支援を受けない理由

✓ 必要ない、我慢できると考える
✓ 受け方が分からない
✓ 面倒

		支援が必要ではないため	支援が必要だが、我慢できる程度であるため	支援の受け方がわからないため	支援を受けるための手続が面倒であるため	支援を受けるのが恥ずかしいと感じるため	支援を受けると相手に負担をかけるため	支援を申し込んだが断られたため（支援対象外の場合を含む）
決してない	2522	93.1%	3.8%	4.1%	1.6%	0.3%	0.2%	0.2%
ほとんどない	4134	90.7%	5.1%	4.6%	1.8%	0.5%	0.3%	0.3%
たまにある	1784	83.5%	9.0%	9.5%	4.2%	1.8%	1.2%	0.3%
時々ある	1442	**76.2%**	**12.8%**	**12.8%**	**5.1%**	2.8%	1.5%	1.5%
しばしばある・常にある	445	**61.3%**	**13.9%**	**23.6%**	**9.2%**	4.3%	4.3%	2.7%

「相談」という言葉の重さ

ヒアリングでしばしば耳にする言葉

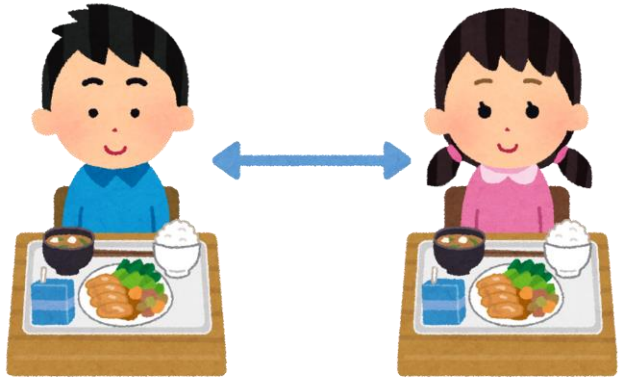
- ✓ こんなことを相談していいと思わなかった
- ✓ 人に相談するということに抵抗感がある

「相談」という言葉は想像以上に重みがあるらしい

- ✓ 話を聞かせてもらうという姿勢の重要性
  →ヒアリング、アウトリーチの活用
- ✓ 親しい人に対してほどしにくい相談
  →第三者的な居場所の活用

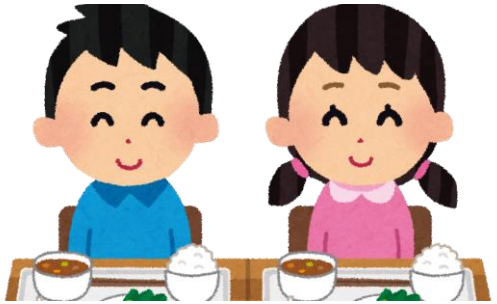
居場所、つながりをシステム化する時代

一人になりやすく、人との距離を感じる社会



- 人それぞれ
- 本音を言えない
- オンライン化
- 配慮

人とつながる機会を意図的に準備しなければならない社会



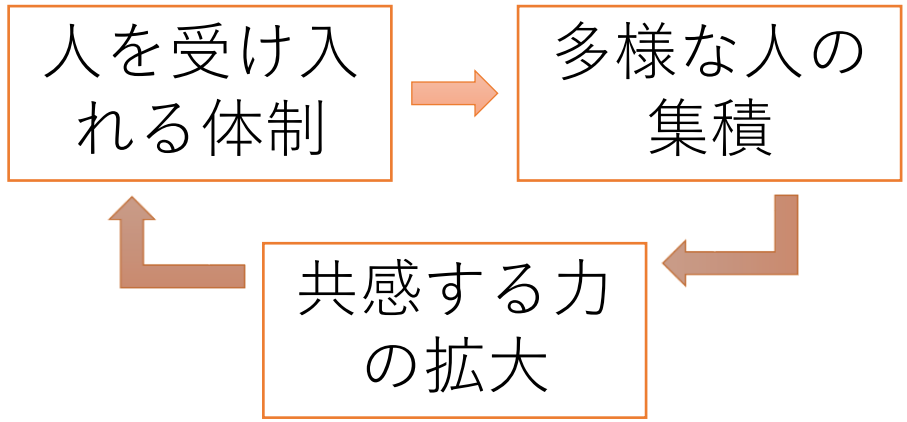
居場所を意図的に準備しなければならない社会

- かつては放っておいても人は誰かとつながっていた
- 居場所が「いるところ」以上の特別の意味をもつように

「居場所」を「つくる」ということ

- 「居場所」と「つくる」の矛盾
  - ✓「居場所」の本質：
    - ➢個々人が事後的に判断するもの
    - ➢つまり、あらかじめ設定することが難しい
    - ➢現代社会は、無目的な居場所を目的をもってつくらないといけない

- 居場所づくりのポイント：二つのアクセス
  - ✓物理的アクセス：手軽に足を運べる工夫
    - ➢近くにある
    - ➢相談・交流を押し出すことの難しさ
    - ➢日常の行動と関連させる（食事、散髪）
  - ✓心理的アクセス：気を使わず居られるために
    - ➢受容と共感の好循環



そもそもの根本的問題：望まれないつながり

- 生協総合研究所の2023年調査：25歳から54歳対象

A	B	A,ややA	B,ややB
わずらわしくても人との付き合いが密接な社会がよい	さみしくても個人の自由を尊重してくれる社会がよい	34%	66%
目的や利点がなければ、わざわざ人とつきあう必要はない	目的や利点がなくても、人とのつきあいは不可欠だ	51.2%	48.8%
多くの人は自分のことばかり考えて行動している	多くの人は周りの人の幸せを考えて行動している	78.4%	21.6%